

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

一豊と掛川

その1

山内一豊、掛川城天守閣を造る

一豊は、掛川城主だった1590年から1600年の間に、掛川の町を中世都市から近世都市へ変ぼうさせる大きな改革を行いました。それまで、徳川家康が20年間支配していた掛川城を、今度は家康に対抗する防衛の城として大改修を行ったのです。

そのひとつとして、三層4階の天守閣を5か年掛けて造りあげました。一豊は初め、織田家に仕え、さらに豊臣家で出世し、この間、伏見城や秀吉が京都に造営した城郭風邸宅の聚楽第など、近世の代表的な城郭築城の夫役を命ぜられ、家臣も動員し、さまざまな築城技術を蓄積していました。

天正19年(1591)に着工し、三層4階建、最上部に物見の高欄を付けた「望楼型」天守閣で、古い天守台や石垣から、初層は東西8間×南北5間ほどであったと推定されています。



天守閣の上層部に取り付けられた一對の鯨
平成4年(1992)8月18日(写真提供 中日新聞社)

復元してわかった日本建築の最高技術

19世紀中ごろの地震で取り壊されていた天守閣を、一豊が築城した当時の資料をもとに同様の材料や工法で忠実に再現したところ、当時の建築技術の確かさが明らかにになりました。

そのなかには、建物全体を垂木にいたるまで覆っている、土佐漆喰仕上がりがあります。戦いに明け暮れた当時の城主が一番恐れたのは、鉄砲と火矢です。土佐漆喰は、藁を1年の間寝かせて発酵させ、非繊維質が分解した壁土を使うため、硬くて火に強く、防水性に

優れています。この技術は聚楽第にも使われた工法で、一豊は信長、秀吉に従い、戦いに明け暮れただけでなく、伏見城の建築にも1,200人の部下と共に参加し、織田・豊臣系の城郭技術を継承していたのです。



復元は現代の大工、左官、瓦職人によって完成され、随所に熟練の職人芸が発揮されています。

1千年以上もつことが証明されている「青森ヒバ」で復元された天守閣の内部



復元の資料となった高知城 御天守台石垣芝土手崩所絵図



掛川城天守閣の復元資料

掛川城天守閣は、平成6年に復元されましたが、その元となった資料は、次のとおりです。

1644年(正保元)に幕府が提出を命じた正保城絵図
1851年(嘉永4)の御天守台石垣芝土手崩所絵図
1854年(安政元)の遠江国掛川城地震之節損所之覚図

残存していた天守台の大きさ
山内一豊が関ヶ原の戦の後に掛川から高知に移封して、「掛川のとおりと指示して造らせた高知城天守閣